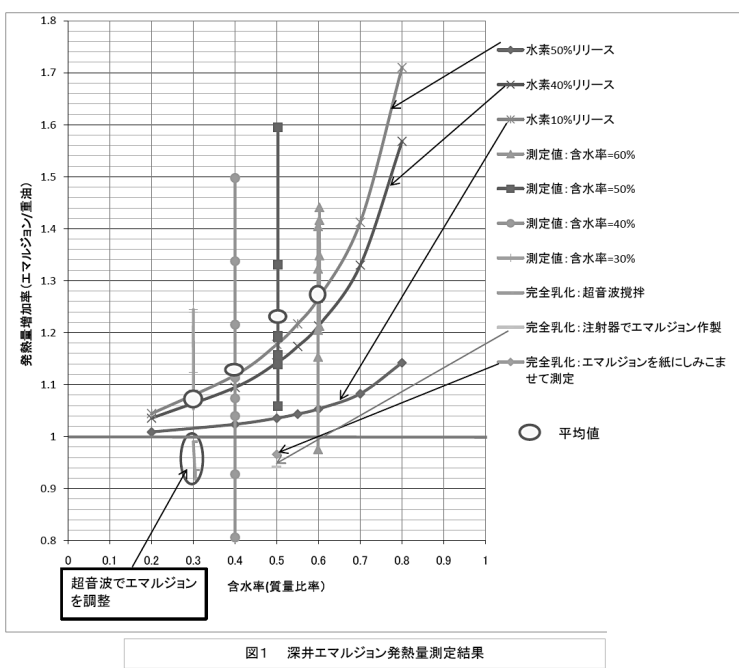


創生水特集



深井エマルジョンの威力

NPO日本スターリング エンジン普及協会理事長 鶴野省三氏

重油と水のエマルジョンは、そこに適当な触媒があれば、水に含まれる水素イオンが解放され、重油のみならず水もまた燃焼熱を発生する。通常のエマルジョンではこのような反応は、発生しないと思われが、深井環境総合研究所が開発した、黒曜石やトルマリンなどを使う水処理装置で処理した水は、それ自体が重油と親和性があり酸化作用エマルジョンを作りやすい水となり、この水で作製したエマルジョンは水蒸気改質がすすむのか、その発熱量は基油が持つ発熱量以上の発熱量が測定される。それゆえ、燃料電池で水素発生させる改質反応と同じ反応がエマルジョンの燃焼過程で発生している可能性を示唆している。そこで、深井エマルジョンの真偽を確かめるべく平成20年12月以来、深井エマルジョンの発熱測定に取り組んできた。今年3月、ようやく深井エマルジョンの発熱測定法を発見し、まとまった結果を得たので、それを報告する。

30%近い燃料節約に

(セラチン製)に注入する水と重油がすくさま分離し、分離した水がセラチンに吸収される。そのため、重油と水の間の水蒸気改質がすすむ。発熱測定は、試料検体をセッティングして点火するまで15分の時間がある。したがって、試料封入カプセルに試料を入れてから15分間で、被測定物に変化が生じたのでは、正確な測定ができない。エマルジョン測定では、このようなことが発生する。これは偶

然、発見したものだが、このような予期しない現象が、未知の領域には存在する。これに対してエマルジョン化していない混合液は、カプセル封入後も重油と水の分離も少なく、試料封入から測定時の発火まで(約15分)の間、重油と水の混合状態が維持される。その結果、水蒸気改質反応が発生するのだから、測定結果はH₂O中のH₂が燃焼熱の増加に寄与する結果を示す。

あるので、エマルジョンの液滴の不揃いさが残るのである。エマルジョンでは、本質的に局所的混合比が不均一であると考えられている。それゆえ、エマルジョンの測定は、可能な限り多くの測定値を算術平均する必要がある。図1の0.4、0.5のOは各含水率における発熱量の平均値である。したがって平均値は水素リリース率50%のライン上をなすように分布する。換言すると水蒸気改質による水反応率が50%程度であることを示唆している。

図1は、発熱量の倍率を縦軸、横軸にエマルジョン中の含水率をとっている。図中の曲線は、エマルジョンを構成する水の水素分のうち発熱量として解放された場合の発熱量増加率を示すもので、ここでは水素分の50%、40%、10%が発熱した場合のエマルジョンの発熱量増加率を示している。発熱量増加率11%のライン以上であれば、エマルジョンは基油の発熱量より多く発熱している。それ以下では、基油より小さいということになる。

深井エマルジョンは、含水率10・6(60%)では、発熱量増加率は1・27程度になる。すなわち基油に対して約30%近い燃料節約になる。この測定結果は、ほぼ間違いのないものと考えられており、これを活用・実用化することは、計り知れない利益を生むことになる。(防衛大学校名誉教授・工学博士)



春になれば草木が芽吹き、夏は緑を増し、秋は実るように企業にも成長と美の季節が存在する。破竹の勢いを見る創生水は25日のニューヨークに続き、29日にはワシントン記者会見を開催する。さらに来月にはケニアやアフリカ諸国で創生水が披露される。創生水はいかなる種を播き、どういう形で成長しているのか、深井環境総合研究所の深井利春代表取締役が語った。

米週刊誌「タイム」(8月9日号)に掲載された記事(中国側が出して合併会社を作り、中国で創生水を販売したいという話)が、中国は、創生水の何に目を付けたのか。まず中国では、石炭の粉を燃やしている現状がある。ところが創生水と石油燃料を混合させたエマルジョン燃料を使ったボイラーでは、水を加えているはずなのに火力が落ちない。燃料油50に対して、とりわけ二酸化炭素を削減でき環境に優しいというところが注目されている。そういうものであれば、中

国政府から援助を引き出すことができるからだ。水の問題でも、創生水を使えば洗剤を使わないで済むとか、水質汚染防止という部分でも大きく貢献できる。中国とのビジネスは、一筋縄ではいかないところがある。中国との合併事業では、ネットに出ている「ダライ・ラマ」に関する所を全部消去した方がいいと警告してくれた人がいる。その人は善意で言ってくれたのだけど、私は消すつもりはない。人情からしても、倒れている人を見て、蹴っ飛ばすことはできない。知らん顔もできない。政治的な批判も書くつもりは全くない。ただ、困っている人がいれば、それが救済する手がかりだ。それが差を出して助ける赤十字精神と同じだ。ダライ・ラマの話も聞いて、心が洗われることが多い。欲の世界から目覚めたい。

結局、維持費がかさばって大変な額になる。さらに垂れ流している現実がある。それは、元からの考え方を変えなければならぬということに必ず気が付く。すなわち汚染させないことだ。その時が、うちの出番だ。日本もそうだが、水質汚染防止法というのは間違っている。これは汚れたものをきれいにして流したさいというもので、だから汚していっていいことでもある。じゃ汚さない技術に

対して、制度支援があるから、紅白の衣で覆われたものが届くから、客はびっくりする。「え、何、創生水ワールド」そこで、僕からの電報が届く。「私の娘が嫁入りします。よろしくお願ひします」という電報だ。「とも」に家族として一緒に末永く生活して「ささい」というものだ。

創業時代からずっとやっているの。すっごくやっています。電報は今、あまり使わなくなりました。携帯電話の時代に電報が来るから、何かあったとお客さんへききよんとする。「祝電です」と言っていると驚いて、中にはそこで泣いてしまう人もいます。その祝電を神棚に飾る人もいます。思いが通じる。それが、どんな世界でもつながっていると思う。韓国でも中国でも、どの国でもいい人はいれば悪い人もいます。犯罪者がいれば、善人もいます。中国12億人、全部悪人なわけがない。必ず善人がいる。日本

と同じで価値観が分かれる人が出てくる。そういうところから広がっていく。日本は1億2000万人に比べて中国は12億人。その意味では日本より10倍の速さで広がるのではないかと。創生水はいろいろな顔を持っている。洗剤がなくても洗える洗浄水。健康にいい水というところで健康水。さらにエマルジョン燃料や水素生成ということ。これが力を入れている。ターゲットは何か。まず基本は、洗剤は一切要らない、農業は要らないというところを中心としていく。そしてその水を通して、石油系のもので全部要らなくなるというところまで持っていきたい。

深井環境総合研究所(株) 深井利春代表取締役インタビュー

創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。

「火」から「水」の世紀へ

創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。

創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。

創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。

創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。創生水は、水と油の間に界面活性剤を加えて乳化させたエマルジョン燃料。従来の燃料と比べて、燃焼時に水蒸気改質反応がすすむことで、発熱量が増える。